

我家の俳諧に遊べ

(連句のご案内)

心太俳諧通信
笹心太

我家の俳諧に遊べ

嵯峨野の落柿舎にこんな戯言(俳諧の文)が残されている。

- 一、我家の俳諧に遊ぶべし 世の理屈を謂うべからず
- 一、雑魚寝には心得あるべし 大鼾をかくべからず
- 一、朝夕かたく精進を思ふべし 魚鳥を忌むにはあらず
- 一、速に灰吹きを棄つべし 煙草を嫌ふにはあらず
- 一、隣の据膳をまつべし 火の用心にはあらず

右條々

俳諧奉行 向井去来

去来のその一を掠め心太俳諧通信の連句のご案内としたい。
ただ最後のその一、隣の据膳は待つは難し。
隣屋、空家である。

目次

1	初めに	
1	1 俳諧（広義）	1
2	2 連歌・連句	1
3	3 俳諧（狭義）	1
4	4 我家・座	2
5	5 連句・半歌仙	3
2	2 我家の俳諧(連句) の遊び方	
1	1 連句は前へ	4
2	2 式目	4
3	3 捌	5
4	4 連句の構成	6
4-1	4-1 表、裏	6
4-2	4-2 構成でのポイント	6
A	A 発句	7
B	B 脇	7
C	C 第三	8
D	D 三つもの	9
E	E 月	9
F	F 花	10
G	G 挙	10
5	5 連句の基底	
5-1	5-1 付く	11
5-2	5-2 離れる	11
5-3	5-3 季節	11
5-4	5-4 雑1	12
5-5	5-5 雑2	13
5-6	5-6 本意	14
6	6 連句の実際	
6-1	6-1 半歌仙の構成	16
6-2	6-2 輪廻1	17
6-3	6-3 輪廻2	17
6-4	6-4 会釈	18
6-5	6-5 遣句	18
6-6	6-6 自・他・場	19
6-7	6-7 挙句の果て	19
7	7 捌きの実際	
7-1	7-1 連衆を募ります	21
7-2	7-2 進行の方法を決めます	21
7-3	7-3 連句の構成を示します	21
7-4	7-4 捌きの実際1	22
7-5	7-5 捌きの実際2	23

TOPIX

1	芭蕉のパラドックス	20
2	変わり連句	24
3	長句と短句	15
4	花の下・月の前	26

1 初めに

1 俳諧(広義)

我家の「俳諧」に遊べ、心太「俳諧」通信。

では俳諧とは？

このサイト(<http://sasa.org>)のオープニングで、もうみなさん御存知のはず。

俳諧て聞きなれない言葉かもしれませんがね。
いつもとちょっと違って見る行為だと申しあげておきます。
そんな行為で作られた短詩が、俳句であり、連句であり、短歌にもなります。
これに一つ付け加えるとすれば。
いつもとちょっと違って見る行為、それを重んじる人生のあり方、
それも俳諧だということです。

2 連歌(連句)

短い句を複数の人間が(複数の人間として)連ねるものを
連歌といいます。たった二句だけでもあれば百韻(百句を連ねる)
という長いものあります。連歌と連句は規模の違いとひとまず
定義しておきます。

長句(5・7・5)と短句(7・7)を連ねる形で

連歌は百韻(百句)を1セットとし、

連句は36句を1セットとします。

実は連歌のサブセットとして36句の連歌がありました。

36歌仙をもじって歌仙という呼び方をしました。

蕉門(芭蕉グループ)はこれを「俳諧」と呼び、

明治になって虚子は、これを連句と呼びました。

3 俳諧(狭義)

蕉門(芭蕉グループ)はこれを「俳諧」と呼び、
と書きましたが、これは蕉門の命名ではありません。

連歌の師匠たちの間(あい)狂言の性格が俳諧であったからでしょう。

連歌百韻の興行は2日にわたって行われたそうです。

何度か休みを取りながら行われたわけですが、その休みの間の

リフレッシュにと手軽な連歌が楽しめました。

滑稽と機知で言葉を連ねていきます。当然限られた時間ですからスピード、即興性が求められました。

俳諧というのはもともと滑稽と機知という意味です。

ですからこのサブセットを俳諧と呼ぶのは当を得たことです。

心太俳諧通信はその滑稽と機知の源泉を「ちょっと違って見る行為」に求めたわけです。

また連歌では次々と場面が変わり、登場人物が変わります。

そうあなたはその場にふさわしく、あるいはその人にふさわしく振舞わねばなりません。

青森にお住まいのあなたが連句の中では東京の高層ビルの下にたっているかもしれません。

か弱き女性のあなたが天下無双の豪傑になることもありえます。

これぞまさに「ちょっと違って見る行為」にほかなりません。ちょっとどころではないかもしれませんね。

4 我家・座

さてここで我家というのは具体的には

1 心太俳諧通信(sasa.org)

2 花の下連句

yahoo chat 生活と文化のユーザールーム 花の下連句

月一金 21:30-23:00

3 心太俳諧通信のオフ会

4 月の前連句(mixi)

を指します。

我家、別の言い方をすれば座といいます。

この「我家」での連句に参加する人を連衆といいます。

昔、連歌の先達は、連歌の座をともにすると、兄弟のように思えてくるといいました。そういう意味でも我家なのでしょう。

5 連句・半歌仙

さて連歌、連句、歌仙、俳諧 と付け合いの文芸を指す言葉が
でてきましたが、

連句という言葉が広く使われていますのでそれでいきましょう。

長さは歌仙(36句)がポピュラーですが、その半分の半歌仙
(18句)を我家では標準とします。

というのは歌仙に費やす(歌仙を巻く)時間は、一刻だったそうです
約2時間ですね。ところが現代人が巻くとこの時間ではおさまりません。
2時間で半分ぐらいがやっとです。

それ以上かけてやっても集中力が薄れて、とても滑稽と機知の文芸
ではなくなります。

現在チャット連句は1時間半でやっていますが、少しきついかないところ
です。

掲示板では1週間というのがめどですね。1日3句ずつ進んで6日間で半歌
仙。

それ以上かかると集中力が薄れてしまいます。

2 我家の俳諧(連句)の遊び方

1 連句は前へ

みなさんも子供のころ尻取り遊びをしたことがあると思います。
語尾の語を頭にした単語を言うわけですが、すでに出ている単語はだめで、「ん」で終わる単語は繋げる単語がないからだめ。
こんなルールで遊んだことがあると思います。

連句も同じです。同じような内容の句はだめ。ストリーが戻るのため
芭蕉はこれを
「三十六句一步も退かぬ心」と表現しました。

連句を前に前に進めるための注意事項をまとめたものを
式目といいます。

2 式目

連歌の式目は室町時代の初期(南北朝時代)にまとめられました。
実はその前にたくさんの式目、我家の式目がありました、
それらを二条良基が折衷して作ったと言われています。
この方は北朝の関白までなった方。また古今の連歌を広く集めて
勅撰(準勅撰)の連歌集を発行しました。
では、連句の式目はといいますと、実はないのです。
えー 上に連句は前に前に……なんて言ってるんじゃないか
思い出してください。連歌の師匠たちの間狂言だということを。
気楽にやろう、俳諧で行こうでしたから、ことさら式目を決める必要がないの
です。
長く染み付いた連歌の式目に当然準じる形になったでしょう。
連歌を知らない私たちは、どう準じたかを探りながら、連句の式目を考えて
いくわけです。

3 捌

連句の進行をスムーズにするために「捌」(さばき)を置きます。
捌といっても特別に誰かを招いたり、我家に専任を置くわけでは
ありません。
連衆の中から指名されます。

- 1 捌の準備としては、この「我家の俳諧に遊べ(連句のご案内)」を
まず読んでいただきましょう。
連歌・連句に親しんでいる方には、目新しいことがあるわけでは
ありませんが、「我家」の部分があります。
- 2 捌も連衆ですから句を詠むのは当然ですが
その上で連句の構成に則り、連句の渋滞がおきないようにします。
- 3 連句が詠み終えてから捌はその検討の司会をしていただきます。

大変そうですね。でも心配いりません。小学校2年生の女子が
軽々と捌きをやった例が我家にはあるのです。
それと捌をやることが連句を理解する一番いい方法であり、
我家の俳諧を一番楽しむ方法だといえます。

4 連句の構成

我家で採用する「半歌仙」に限定して説明します。

4-1 表、裏

連句することを「巻く」というと書きました。

じゃー長い紙にさらさらと書かれて保存されたか
そういう時代もあったのでしょうが、室町時代以降
懐紙に書かれるようになったそうです。

表六句、裏十二句

この18句で半歌仙。

現在の我々はそんな懐紙もなくパソコンの画面に直接
打ち込んでいるわけですが。

表はおだやかに、裏は元気よく という性格があります。

序破急という中世からの慣いと言っていいかもしれませせん。

そして表に月、裏に月、花を詠むという慣わしもあります。

二月一花が連歌の基本セットで、半歌仙はその基本セット、そのものなので
す。それも我家が「半歌仙」を採用する理由の一つでもあるのです。

4-2 構成でのポイント

半歌仙18句の構成でのポイントを見ていきましょう。

長句(五七五)、短句(七七)と連ねていきます。

表

発句

脇

第三

四

五 月の出所

六

裏

初句

二

三

四
五
六
七
八
九 月の出所
十
十一 花の出所
挙

特別な名前は表に多いようですね。
順次説明していきます。

A 発句

連句の出だしです。客が詠むものとされています。
実際に客が詠むこともあるでしょうが、「我家」の常連の
「巻き」であることが多いでしょう。

その場合でも「客」として詠むということは、大事です。

さあ客さんとして、あなたは招かれました。

1. まず姿勢を正して、かしこまります
2. 時候の挨拶をします
3. つまらぬものですが手土産をだします

大体こんなところでしょうか。

これがそのまま発句の性格です。

時候の挨拶。当然今の季節です。それを「眼前当季」といいます。

そう季節の語、季語をいれます。

時候の挨拶をして、一息いれて手土産を渡します。

一息入れる、実際にはその家の主が挨拶を返してくれるから

「切れ」を生じます。

手土産、ここにくるまでのちょっとした出来事や

感じたこと、あるいはみんなで考えたいことなんてことでもいいんです。心が
こもっていれば。

もう一つ大事なことがあります。それは玄関をあけて何を言おうか考えこんで
しまったら、

追い返されてしまうかもしれません。そう玄関を開けたらすぐに挨拶をしなければ。

発句を指名されたら間髪をいれずにどうぞ。

B 脇

発句の脇を付けるということで、二句目を脇といいます。

発句が客なら、脇は主(亭主)が詠むものとされています。

挨拶を返し遠来の客へのねぎらいの言葉も自ずとでてくるでしょう。

当然挨拶を返すのですから、発句と同季(同じ季節)、同場(同じ場所)です。挨拶に挨拶、間髪を入れずぬ返さないと、お客さんが間違えましたと帰ってしまうかもしれません。

脇の留め(句の終わり)は韻字留め、体言留めがよいとされています。

韻字留めとは漢字で留めること。体言留めとは(主語となりうる語・名詞)で留めること。

この2つの留めの由来は、

1 韻字留め

連句というのは明治時代から使用されるようになりました。だが「れんく」は平安時代からあったというのです。聯句と書きます。

和歌に漢詩であわせるものです。和漢朗詠集にその形をのこします。

二句目が漢詩ですから確かに留めは漢字ですね。これが韻字留めの起源だということです。

2 体言留め

体言留めというのは新古今の和歌で多用されて、それが連句の脇に、流用されたということです。

どちらで呼ぶにしても、どちらも述語がたらないのです。次の句に含みを残すことになります。

C 第三

主客の応接のあと、宗匠(捌)がさあ始めましょうと連衆に宣言します。

事実上の連句のスタートといってもいいでしょう。発句、脇は同季同場でしたが

第三は場を変えます。季節は少し進めます(あいまいな表現ですがあとで詳しく説明しましょう)

そして宗匠ですから、格調高くということになります。

連衆に宣言というのはこんな留め字(句の最後の字)であらわすことが多いのです。

「て」 ready 準備ができたよ

「らん」 Let's go さー行こう

「らん」留めというとは推量の「らん」と誤解されることが多いんですが、「ぬ」の音便「ん」もふくむもので、私は以前から意思の「らん」と説明していました。

ところがもっと便利でそのものずばりの言葉があるのです。

「ん」留め はね留めといいます。「ん」を墨で書くとはねるでしょう。

第三は飛び出すんだということを端的に表現しています。

今後我家ではこちらに統一しましょう。

発句が詠嘆の「かな」や「や」で終わったときは

「ん」留めのほうがいいですね。「て」ではしりすぼみになりそうです。

D 三つもの

発句・脇・第三までを称して三つ物といいます。この三つ物のできを見れば連句全体のできが占えるといいます。そうですね。客、主、宗匠の役割を担うですよ。

ほらもうちょっと違った見方をするとところにあなたを置いてるのです。

ここで普段のあなたをリセットして連句モードに入るわけです。

それから発句も脇も間髪を入れずに詠むのだと書きました。

じゃー第三はもちろん間髪を入れずにです。

宗匠ですからもたもたしてたら、格好悪いでしょう。

そう三つ物はリズム合わせでもあるのです。

わかりきったことですが連句は即興の文芸なのです。

E 月

表の五、裏の九を月の出所(定座)といいます。

二月一花、これの意味するところは何でしょう。
日本人の美意識において華やかな花の美よりもしみじみした月の美を大事にしたからだと思われます。
また月を表に置く事も、その表れともいえるでしょう。

では月の季節はといいますと
平安時代に春秋合戦というのがあったそうです。春の方が美しい、秋の方が美しい。
そんなやり取りの中で月は秋の美の代表。花は春の美の代表となったと考えられます。
ですから月は秋に詠まれるのが望ましいということになります。

F 花

裏の十一で花を詠みます。4-7でも書きましたが春の美の代表です。
春の花、たんぽぽ、れんげ、あんず、アマリリス、みんな春の花かもしれませんが
連句の花は惣名の花なんていいです。すべての花の美の象徴なのです。
ですから花の名前を詠んでも花の一種をあげただけで「花」を詠んだことにはならないのです。ではどう詠みましょう。簡単です「花」と詠めばいいのです。
でも具体的なイメージはあります。桜です。
桜を思い浮かべて花と詠めばいいのです。

G 挙

裏の十二 お疲れ様でした、この巻の終わりです。
花を受けてめでたくすみやかに詠めばいいんですが、
連句の流れによってはめでたくでは浮いてしまうこともありましょう。
そのときは流れにそってということになります。

5 連句の基底

5-1 付く

尻取りでは、前の語の最後の音を次の語の頭にするというのが「付く」ルールでした。

連句では前の句から喚起できるイメージでつきます。こんなことを考えるとイメージしやすいかもしれません。

- 1 進行している連句では誰が登場しているでしょう。その人かその人にふさわしい人を出すといいでしょう
- 2 進行している場はどうでしょう。その場にふさわしい景物、人物が添えられるといいですね。
- 3 前の句に詠まれている物に関連する物をつけることもできます。
- 4 前の句が謎掛けでしたら、その謎を解くのもいいでしょう。

1, 2, 3が自然な流れだとしたら4は面白みの付けともいえます。ただ1, 2, 3でも面白みは大事なことです。

思い出してください。俳諧。ちよつと違って見る行為です。それが本当に発揮されるのは一句、一句のできというよりもこの付け合いにあるのです。

5-2 離れる

前句に付き、前々句(打越)に離れます、離れるというのは打越からはこの句を喚起するのが難しいということです。前の句にしっかり付くことができれば離れるということはその裏返しですから、自然にわかってくると思います。これについては輪廻でもふれます。

5-3 季節

A 連句は月花を中心として、四季を詠んでいきます。

春、秋は3句つながり。夏、冬は一句あるいは二句。

この構成は、やはり日本の詩情が春秋に集中しているということでしょう。

また古今集などの構成も春秋の分量が多くなっています。

同季の場合でも連句は前に前に進むわけですから、春でしたら 早春、仲春、晩春と進むのがよしとされます。(三春の渡り) 秋も同様です。

三つ物で詠まれた場合、発句と脇は同季の同時刻ですから、そうきれいにはいきませんね。

ただ連句は季節の移ろいを詠むのだということを忘れないで下さい。

B 夏、冬が発句に詠まれた場合当然二句続きになるわけですが第三以降の夏、冬についても二句立てを我家では推奨しています。季節の感興が古代・中世と変わってきていて、夏・冬の関心度があがっていますし、一句で季節を変えるとすると前後に「雑」の句が入り構成が難しくなります。

C 季節は生活の実感を大事にしてください。

いわゆる歳時記での季節は旧暦ですから、連句の流れではそぐわないことが生じます。

例えば七夕は歳時記では秋として挙げられていますが、現在の7月7日を秋としてしまうと、夏休みなどの句で受けることができなくなってしまいます。

また立秋から秋(8月7日近辺)とすることは多いでしょうが、そうすると夏休みの宿題の駆け込みが秋になってしまいます。

D 眼前当季

発句は眼前当季といわれます。

今その場を詠みます。それが季語という形になったわけです。

ですから季語を詠まなくても連衆に今と場が、切実に感じられればいわゆる「季語」はなくても許されることとなります。

例えば中越地震が詠まれるなんて時もあるでしょう。

脇が季語を添えるか、あるいは添えなくても発句との同時性がはっきりしている場合は脇の句に季語がないということも可能です。

5-4 雑1

季語を入れない句を雑(ぞう)の句といいます。

A 季節と季節をつなぐ時

例えば春三句のあとに夏をつなぐなんて場面で雑の句を入れます。ただ春三句に夏が自然につながりそうな場面、雑をいれなくても構いませんが5句季語の句が続くことになりますから、単調になりそうです。春3句から秋、冬というように離れた流れになるときは必ず雑を入れます。

B 連句の場をはっきり変えたいとき

名所旧跡を詠み込みます 連歌の時代は歌枕の地名などが多く詠まれたといわれていますが「我家」ではどんな地名でも前の句に繋がればOKです。

C 登場人物をはっきりさせる

人名を詠みます。その人物の時代も流れに投げ込むことになります。

D 時代をはっきり変える

王朝とか元禄とか、うまく使えば変化に富んだ巻になります

BもCもDも、Aの機能をもっています。ただ表はおとなしくということで変化を好みませんですからAは表、B,C,Dは裏で使われることになります。

5-5 雑2

A 恋

伝統的な分類では雑に分類され、我家でも便宜上、恋を雑に分類しますが、真冬の恋もあれば、真夏の恋もあるでしょう。

季語が入った句と重複してもかまいません。

「恋なくば俳諧にあらざ」と芭蕉はいいました。

恋と取れる句があれば、ただちに恋の句をそえよともいいました。

ということで恋は二句立てが多いのです。

恋の句がたくさん出てくれるなら一句だけでもいいよなんてことも芭蕉はいいました。

とはいえ表では控えめという気持ちが働きますから詠めないですね。

季節のつながりに使うのは、難しいようです。

ただ恋はなかなか幅広くて、夢、想い、恨みなんでも恋語とされます。
我家では恋が確実にでることを願って
恋呼び、恋、恋離れという3点セットで提供しています。

B 神祇積仏

日本は八百万の神が飛び交い、仏教東遷の地。
宗教の話題も豊富です。キリスト教もイスラム教も
宗教の自由です。鬼、悪魔もでてもいいし、坊さん、尼さん
ブラザー、シスター、我家ではOKです。
ただこれも季節のつなぎには使いづらく
我家では恋離れに使うことが多いです。
神仏に未練をたってもらおうと言うわけです。

5-6 本意

一句一句はシンプルにと書きました。初心の方は一句に詰め込みすぎる
ことが多いとも書きました。それと形容・修飾が多いという傾向もあります。
後者については「本意」ということを考えればすっきりしてきます。

「本意」ほいと読みます。

たとえば「月」といえば、丸くて、金色(黄色)で 夜出るもの
秋がきれいだというようなことは、みんなが思い浮かべられることです。

例えば

まん丸で金色です夜の月

これは月だけで足ります

祝勝の宴楽しく華やかに

宴(うたげ)だけで楽しく華やかは伝わりそうです。

胡瓜青々しゃきしゃきと

旬の胡瓜なら胡瓜だけで伝わりそうです。

じゃー 本意って 何をみればわかるの

はっきりこれを見ればってないのです。国語辞書や歳時記にヒントがあること
があります。

がそれよりも大事なのは、言葉の実感、生活の実感です。

まず言葉をそいでみましょう。これは言わなくてもわかるなと思ったらそいで
しまいましょう。

我家は「ちょっと違って見る行為」と標榜していますが、違いを感じるためには「まっすぐ見る行為」が必要なのです。「本意」を知ろうという行為がちょっと違った見方でもあるのです。

Topix3 長句と短句

長句(5・7・5)と短句(7・7)を交互に連ねていきますが、字余り、字足らずも我家では許容しています。無理に字数(音数)をそろえて窮屈になるよりはよしとします。

ただ長句ののり(5+7・5 あるいは 5・7+5)、短句ののり(7・7)は大事にしてください。声にだしてみると分かるでしょう。

6 連句の実際

6-1 半歌仙の構成

連句の構成を述べてきましたが、四季を詠みこみ、名所、人名、神仏まで、もうこれは世間の縮図です、半歌仙たった18句でこれだけのものが詠めるのですから驚きです。それとこれらのもををしっかり詠もうと考えていきますと、半歌仙の構成はおおよそ決まってきます。初心者が捌をするとき悩まなくてもいいというのが、我家が半歌仙を選ぶ理由にもなっています。まず表からみてみましょう。

A 表

発句	春	夏	秋	冬	正月
脇	春	夏	秋	冬	正月
第三	春	雑	秋 (月)	雑	雑
四	雑	秋	雑	春	春
五	夏 (月)	秋 (月)	冬	春 (月)	春 (月)
六	夏	秋	冬	春	春

表六句 季節をスムーズにつないでと考えると、上のようになります。

もちろん雑は 5-2 の A です。

それから月は本来秋の美の代表ですから、表に秋が詠まれるときはその中でということで秋から始まる時は第三で詠まれることになります。

B 裏

発句	春、夏	秋、冬、正月
裏初	雑 (恋呼び)	雑 (恋呼び)
二	雑 (恋)	雑 (恋)
三	雑 (恋離れ・神仏)	雑 (恋離れ・神仏)
四	冬	夏
五	冬	夏
六	雑 (人名 or 地名)	雑 (人名 or 地名)
七	秋	秋
八	秋	秋
九	秋 (月)	秋 (月)
十	雑 (人名 or 地名)	雑 (人名 or 地名)

十一 春（花）
拳 春

春（花）
春

ずいぶん整理されてしまいます。

6-2 輪廻1

前述のように構成を決めて、連句は前へ、前へと進むわけですが足踏みしたり、後戻りしたりすることがあります。

足踏みしたり、そう内容的に前の句とほとんど同じの句が出されることがあります。これを付き過ぎといいます。

前の句に付き前々句(打越)から離れるわけですが、前の句よりも打越以前(打越を含む)の句に付いてる場合を輪廻と言います。打越の句に付くのを輪廻、それより前を遠輪廻といいます。

輪廻はご存知の通り、仏教用語。生きとし生けるもの、前世の因果で現世があり、現世の因果が来世を決め、永遠に生死を繰り返します。

それを釈迦は断ち切り、涅槃(彼岸)に行かれたわけですが、人間の都合で現世(此岸)に呼び戻らさたり(如来)なんてことも。それほど輪廻は断ちがたいのです。

いろいろな単語の繋がり、連想で輪廻と判断したり、場が変わらないからと判断したり難しいことがあります。一番簡単で効果のある方法があります。A->B->Cと句が進んできました。

A-!C B->C AとCは付かずBとCはつくべきです

A->Cの付きのほうはB->Cの付きより自然だと思えたら輪廻です。

そうです。AとCを並べてみればいいのです。

6-3 輪廻2

連衆も初心のうちには、打越にだけ気を配ればいいでしょう。

でも、もう一つ注意しなければならないことがあります。

その場、その場で一生懸命、輪廻にならないつもりで句を投げててもあとから見るとなんと自分の句がみんな同じ調子だと気づいてぞーっとすることがあります。

連句の目的は、自在な発想。

自分を違った場においているのに、変われないのでは

「我家」の連句にはなりません。投げるとき自分の前に投げた句はなんだったか、チェックしましょう。

6-4 会釈

会釈(あしらい)と読みます。会釈(えしゃく)でもいいんですが、これももともと仏教の言葉だそうです。

軽く自然に受けるということです。一句、一句が際立つことはいいことですが、みんなが力みかえっているようで、落ち着かなくなります。

それと初心のうちはどうしても一句の中にたくさんの事を盛り込みがちです。シンプルな句を心がけてください。

でもこれは初心者だけの問題ではないのです。

宗砌、芭蕉が憧れた宗祇の先輩ですが

この人、北野天満宮の連歌奉行に就任したら、「宗砌は名句を詠まなくなつためでたい」と彼の先輩から誉められたそうです。

自分の句が目立つよりも自然な流れを重視するようになったということでしょう。会釈上手になったということです。

6-5 遣句

遣句(やりく)、遁句(にげく)ともいいます。

前に前に進むのが連句、句がでなければ話になりません。

連衆がじっと考えこんでしまって、連句がとまってしまうなんてことが時に起きます。で捌きが、なんとか連句を進めるために句を投じることがあります。

緊急事態ですから、句の付けの良し悪しは問われません。

連歌の末期(豊織期)から 2日の百韻を1日で詠むことが多くなったそうです。でこの遣句が横行しました。

連歌の式目は相変わらず細かいし、内容は空疎だし

こんな風潮が芭蕉を俳諧に向かわせ、連歌に戻らせなかった理由の一つかもしれません。

6-6 自・他・場

自分の事として詠むのを自。他人の事として詠むのを他。
人から離れて場を設定するのを場といいます。
これをうまく組み合わせて行くと自と変化に富んだ流れが
できます。連衆みんなが意識できればいいのですが、
なかなかそこまではできないでしょう。
捌に余裕があれば「自・他・場」を意識して巻いてみるのも
いいでしょう。
それと自、他というのは、あくまでも連句の中に登場している
人物から見てのことです。

6-7 挙句の果て

さあ挙句が出て
「満尾、お疲れさまでした」と連衆が拍手。
挙句の果てが始まります。
巻き上がった連句の検討です。「この検討があるから
連句は2度おいしい」と言う人もいれば
「せっかくいい気持ちで終わったのにケチをつけなくたって
いいじゃないの」という人もいます。
芭蕉はなぜ反古といいながらすてなかつたんでしょう。
連句は巻いてるときは感興を大事にせよ。
巻き終わったらそのできあがったものを冷静に見よ。
ということだと思えます。
連衆以外にも我家の居候も加わることもありましょう。
隣の隣の隣の人が加わることもあります。
連衆だけの検討ですと、感興が残ってる、あるいは句を巻けば兄弟という
ホンワカムードが残っていて、大事なことを見落としていることもあります。
それに我家の連句は「ちょっとちがって見る行為」だと掲げているのです。
こんな視点もあつたのかと思えば次の連句につながります。
間髪を入れずに付けるための準備です。
そんなことで我家はこの挙句の果てをととても大事にしています。

Topix 1 芭蕉のパラドックス

A みな遣句

14の遣句で芭蕉が連歌に戻らなかった理由を想定しましたが「俳諧三十六句みな遣句」と芭蕉その人がいっています。では芭蕉の連句で付けや輪廻を無視した句があったかというところではありません。

あんまり難しく考えずに、思うように付けてみよ。間髪入れずにつけよ。ということを強調したものと解したほうが妥当なようです。

「俳諧は三尺の子につくらせよ」

「俳諧は難きものにあらず易くつけよ」

なんて芭蕉の言葉も残っています。

B 則反古

「文台おろせば則反古」なんてことを芭蕉がいました。

ここでいう文台とは、懐紙を載せて記録する小さな台。

それをしまうとき、連句を記録していた懐紙はもういらぬもの紙屑だということです。

ですがその反古に芭蕉自ら修正さえ加え、

芭蕉が加った連句は蕉門の選集に収められています。

後世の我々はそれを連句のお手本とさえ思っているわけです。

「俳諧三十六句みな遣句」と言った芭蕉。

「文台おろせば則反古」

騎虎の勢いを感じる言です。そう連句はその巻いてるときの感興こそ全てだ。いいですね。

でもその記録を破り捨てはしなかった。

7 捌の実際

7-1 連衆を募ります

半歌仙でしたら3人から5人、多くて6人でしょうか。

3人で詠むのを三吟といいます。四人だったら四吟、以下同様です。

7-2 進行の方法を決めます

A 膝送り

詠む順番を決めて詠んで行きます。ただ一卷中、同じ人につくのを避ける工夫が必要です。三吟を例にとりますと

ABCABC BACBAC

どこかで入れ替えます。

B 出勝ち

詠む順を決めずに付け句を募ります。その句が妥当でしたらその句を頂いて前に進みます。

ただ同じ人が二句続けて詠むことや、打越(一句おいて)詠むことは避けてください。したがって三吟では出勝ちはありません。

三吟膝送りというのが一番落ち着いて連句を楽しめるでしょう。出勝ちはお祝い等でできるだけ多くの人に詠んでもらおうなんて時はいいかもしれません。

ほかに「治定」と称する進め方もあります。

一定期間、付句を募って、捌きがその中で一番妥当だと思ふ句を選びます。これは連句の即興性を大きく損なうのと、多用な見方を捌きの見解でスポイルしてしまう恐れがあります。

我家では「治定」は禁止しております。

7-3 連句の構成を示します

4-1の半歌仙の構成を参考にして捌は連衆にこれから始まる連句の構成を示します。

式目というのは、連句全般に渡っての心構え、禁止事項、構成等をいいますが

その構成の部分だけを式目ということがあります。
我家ではこちらを式目と呼ぶことにしています。
この我家の俳諧に遊べ(連句のご案内)が広義の式目となるわけです。
捌は式目を示すと同時に詠み順も決めましょう。半歌仙 18 句全部を決める必要は必ずしもありませんが、表六句までは決めておきましょう。
あと必ず捌も句を詠んでください。三吟だったら 1/3 を五吟だったら 1/5 を。
捌が句を詠む事が一卷のコントロールになります。単調になっていたら飛躍したり、はしゃぎすぎた流れでしたら落ち着かしたり、それが捌の遊びでもあるわけです。
そう連句の進行中、一番流れについて考えている人は捌ですから。

7-4 捌きの実際1

A 句の出を促す

最初に式目や詠み順を示したにせよ、一句毎に促してください。
突発的な事故等で詠み順を変えたり、あるいは連衆の差し替えも必要になります。チャット連句では、回線状況等でこういうことが度々おこります。

A1 発句の出

まず発句がスムーズにでることが大事ですが、あまりせかせさないようにしましょう。発句をと指名された方もどきどきしてます。そのどきどきを連衆みなで共有しましょう。

忌日、追善、祝い等で立句(座に参加できない人の句を発句にすること)、脇起こし(立句を頂いて脇から連衆の句が始まること)もいいですが、連衆の共通認識になるような人と句を選びましょう。
また連衆として参加できる人の句を立句にするのは、意味がありません。その方に発句を求めればいいわけですから。

発句は連句の重要な要素です。脇起こしは慎重に。

B 花、月、恋

花、月、恋といった式目は一人の人に集中しないようにしましょう。

C 輪廻の判定

前に前に進むのが連句。連衆は付き筋をみつけるのが精一杯で輪廻にキズカナイことも多いでしょう。「輪廻」といってあげましょう。
打越と並べてみるのもいいです。それから連衆がその連衆がすでに出している句と同じような句をなげたら、それも「輪廻」といってあげましょう。

あとの遠輪廻を取るか取らないかは、連衆の力量次第。ただ輪廻の判断の基準がずれないようにしましょう。

D 一句の吟味

一句の良し悪し、含みの度合い等を吟味するわけではなくて、内容がまるでわからない あるいは、日本語としておかしい。前の句の言い換えでしかない。

一句で二句進んでしまっている。発句以外に「切れ」がある。

等々いろいろあります。ただそれを指摘できるかできないかは捌きと連衆の力量です。

内容がまるでわからない句は「捌は理解できません」と蹴るもいいでしょう。

なかなか大変です。でもうーんうーんうなって考えるものでもありません。句を投げた人が待ちくたびれてしまいます。

チャット連句など特に捌きのスピードが一巻の良し悪しに響きます。

7-5 捌の実際2

A 捌の範囲

発句と挙句は捌の範囲外とされ、我家でもそれを踏まえてきました。そうです。ね。客人の挨拶が気に食わないなんて初めからやったら帰ってしまうかもしれません。最後の閉会の挨拶をやり直しさせてもらけるだけです。ところがそれが弊害を招いてしまったことが多々あります。

たとえばこんな発句を投げられたらどうでしょう

世の中に新しきものはなし秋の暮

これは以後どんな句を詠んでも絡んでしまいます。

そういうことがありますので、この発句では一巻が巻けないなど

捌が判断したら発句を変えてもらってください。

挙げも付きがまるで感じられない。巻き上がろうとする連句を侮辱するような句などでもありません。その場合は蹴ってください。

表はおとなしくというのが常道ですが、転変地異や、大事件等、連衆の関心が集中するようなことがあれば、それが発句に詠まれるのは、自然のなりゆきです。当然脇もそれに合わせる形になります。

それから以降を常態に戻すのは、第三(捌が投げる)の役割ということになります。

B 捌の判断

連句進行中は捌の判断が唯一です。連衆は捌に一任です。
捌の判断への疑義があることも当然です。
でもそれは検討のときの楽しみにしましょう。

C 一直

チャット連句で時間が限られている場合や
初心者を迎える場合。軽微なミス、ちょっとした言い換えで句意がはっきりするものについては捌がそこを修正して採用し先に進めることも可能です。
これはやむを得ない場合の対応ということで、多用は禁物です。

D 捌の最後の仕事

検討の司会です。連衆の不満がまっているかもしれません。
また捌、連衆がいい気持ちで終えられても、それは一時の興奮かもしれません。自分も冷静に振り返りましょう。
それよりも我家の居候たちが、吠えてくるかもしれません。
いろいろな視点があってこそ我家の俳諧ですから、
何とでもいってこいと開きなおりましょう。

topix2 変わり連句

我家の俳諧についてご案内してきましたが、
ちょっと変わった連句をご紹介します。

A 競上がり連句

挙げから詠んでいきます。
挙げが詠まれました。その挙にふさわしい花の句、
その花が詠みたくなるような十。そんな具合に
発句までいくわけです。
一見難しそうですが、やってみると普通の連句と
そう変わりはありません。

もちろん輪廻はだめです。

B 虫食い連句

半歌仙18句の中から3, 4句残して、その間を連句の付きと離れるという原理でつないで行こうというものです。現在出されている句の前後につけます。残す句も捌きが連衆から募るのがいいでしょう。よく知られている故人の句を置くことも可能ですが長句を短句等、みだりに変形はしないように。

C 尽くしと隠し

一句一句に花の名前を詠み込んで連句を巻いてみよう、山の名前を読み込んで連句を巻いてみよう。というようなことです。ただ花の名前だと菊の花といわなくて菊で花とわかりますから尽くし山や川の名前だと付けないとわからないことが多いわけですがそこを句にいれずに詠みますから隠しということになります。

D 自由律連句

自由律(季語や五七五に拘らない)での連句です。季節の概念がありません。ですから月、花の定座もありません。イメージのおもねるままに付けていきます。ただ長句、短句のリズムがありませんから一本調子になりやすい欠点があります。もちろん輪廻はいけません。

E 本歌取り

連衆に共通の本歌のテキストを示して(百人一首等)、その歌から句を作っていきます。1首から1句ぐらいが適当でしょう。

F 独吟

連句は複数の人で巻くものですが一人で巻くことも可能です。あなたが一人何役もやるわけです。一人だからといって、前の句を修正したりしてはだめです。潔さがなくなります。通常の連句や変り連句も一人で

楽しむことができます。苦勞の方が多いかもかもしれませんね。

Topix4 花の下・月の前

連歌の最初のブームは鎌倉後期から室町初期といわれています。

元寇、鎌倉幕府滅亡、南北朝の騒乱。

その間連歌には2つの流れがありました。

堂上連歌(貴族階級)と地下連歌(ちげ 武士・庶民)

地下連歌は、花見と筵を敷き、月見と筵を敷き

興の赴くままの 謎賭け・謎解き 言葉遊び。

室町初期には堂上連歌と地下連歌は融合されいくのですが

地下連歌の代表名として

花の下、月の前は後世まで残りました。

花の下は北野天満宮を中心として武家階級

月の前は奈良興福寺を中心として僧侶階級

そんな由緒ある名前を誰に断るもなく

チャット連句 花の下

mixi コミュニティー 月の前

連歌初期の雑駁としたエネルギーを取り戻したいと

笹心太が名づけました。

後書き

ネットで連句を10年近く続けています。

俳諧通信での連句に対しての考え方や指針はそのつど発表してきましたが、まとまりに難がありました。

またせっかく培ってきた座の雰囲気が一変されるような出来事もありました。

2004年8月に連句の案内、指針としてこの「我家の俳諧に遊べ」を作成しました。その後「心太俳諧通信」、「花の下」では

「我家の俳諧に遊べ」を理解していただいて、連句を楽しんでいただいております。内容的には笹の10年来の知識と実践によって書きました。

これを書いていた時点では一冊の本も参照いたしておりません。

今回HTML版をPDF版に改訂するにあたって、読み直してみたら一カ所間違いがありました。何年も恥を晒していたなど赤面いたしました。

お読み頂きお気づきの点がございましたら

有限会社俳諧通信の編集部までご連絡くださいますようお願いいたします。

我家の俳諧に遊べ

著者 笹心太

2006年7月20日 オンデマンド・プリント A5版(初版)

URL:<http://sasa.org>

商品ID hopc06001

定価 ダウン・ロード版 無料

オンデマンド・プリント A5版 500円(税・送料 込み)

編集人 笹心太

発行人 中村喜吉

発行所 有限会社 俳諧通信

URL:<http://haikai.etowns.org>

mail:haikai@bird.ocn.jp

〒673-0003

明石市鳥羽1419 中川ビル203号